

# シナリオ作成にかかわるHTMLの知識について

株式会社NTTデータ

# チュートリアル画面で取得したタグについて

```
<input type="text" name="商品名" size="35" id="i_text"  
onchange="logprint(this, 'change');">
```

Input ⇒ tag

⇒<>でくくられた中の一番左側に位置する文字列  
コントロールがリンクかボタンかなどを指定する。

type="text"

⇒タグに対して補足でつける属性

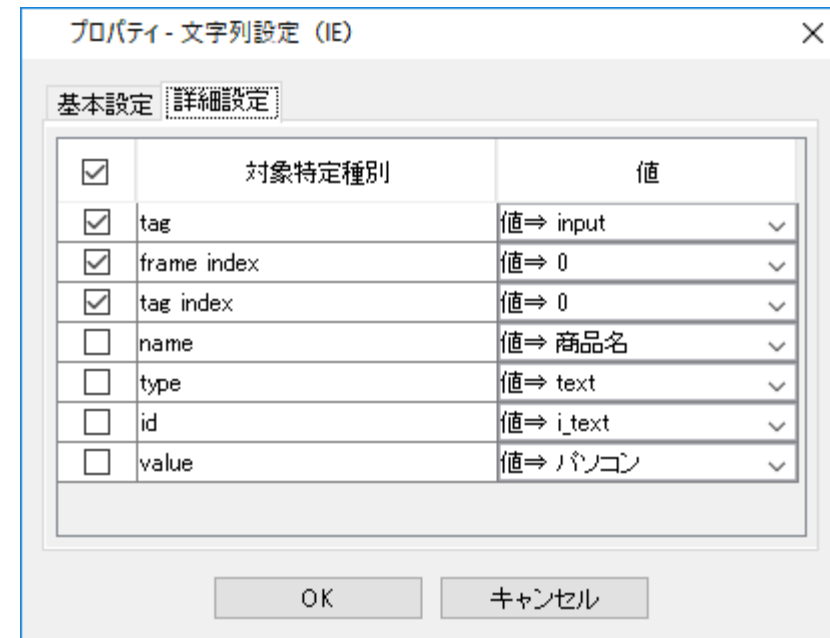
例えばtypeをpasswordなどにすると  
入力した文字がマスクされる。

name="商品名"

⇒画面作成者が名前を付けたい場合に使用する。

id="i\_text"

⇒画面作成者がidを付けたい場合に使用する。



# Chromeの機能で取得した「次へ」リンクのXPath

「`//*[@id="ap-lists"]/div[3]/a[5]`」

上記のXPathを細かく解説すると以下の通りです。

`//`は途中を省略するという意味です。

つまり上の例を見ると、途中のタグを飛ばして一気にidがap-listsのタグを指定しています。

その下の階層にあるdivタグの4個目

divタグの下階層にあるaタグの6個目

という指定になります。

※XPathだと0から数字が始まるため、`[3]`が4個目、`[5]`が6個目となります。

2ページ目は「`//*[@id="ap-lists"]/div[3]/a[7]`」とXpathが変化します。

# 今回手動で設定したXPath

「`//*[text()='次へ 』']`」

上記のXPathはテキストが「次へ 』」のリンクを指定しているという意味になります。

このようにすることでaタグの増減にかかわらず必ず次のページを押下することができるので安定化につながります。

# XPathで使える関数を紹介

## contains

特定の文字列が含まれている箇所を指定する

例: `//a[contains(@class, "next")]`

## and

複数の条件が合致する箇所を指定する。

例:

`//a[contains(@class, "next") and text()="次へ 》"]`

